第 79 号の刊行によせて

高層気象台は 1920 年（大正 9 年）に設立され，本年 2023 年（令和 5 年）で 103 周年を迎えた．その間当台では，高層大気をはじめ，日射，放射，オゾン，紫外線など，気象や気候変動にかかる重要な要素を高い精度で継続して観測してきた．それらの観測手法は技術の進歩等を背景に様々な改良・改善等が図られてきたが，本年 3 月 31 日 21 時の観測からは日々の高層大気観測についても，ラジオゾンデを取り付けた観測気球放球にかかるプロセスが，人の手による過程から自動放球装置によるものへと移行した．これまで長きに渡って観測者自らの手で観測気球を飛翔させてきた高層気象台の歴史の新たな 1 ページとなった．

さて，この「高層気象台彙報」は，職員による技術開発や調査・研究等の成果を広く紹介し利用していただくために刊行しているものである．本号でも観測測器に関する特性や改良などについて掲載している．手に取られた読者の皆さんの興味・関心を引き，お役に立てることができれば幸いである．さらに，本彙報が今後も継続して刊行され，高層気象業務の発展につながっていくことを期待したい．

ところで，本彙報は 1923 年（大正 12 年）の第 1 号発刊から本号で 79 号を重ねたところだが，今般の第 79 号より，従来の印刷物を主体とする形式から電子媒体のみの刊行へと移行することとした．これは近年，電子媒体化が各所で進んでいることも背景にはあるが，当台の調査結果をよりタイムリーに紹介させていただくことを目的としたものである．これにより，従来は印刷の関係もあり当該年度のまとめとして年度末に刊行することが多かったが，今後は年度末を待たず各報告の掲載準備が整い次第，随時に紹介できるようになると考えている．また，号の通番もこれまでは年度単位で割り当てていたが，今第 79 号からは年単位で番号を与えることとしたので，ご理解いただきたい．

終わりに，本号に掲載の各報告について査読を行っていただいた，各分野の専門家の方々に深く感謝の意を表するとともに，各業務に多忙な中にあっても，技術開発や調査・研究等を遂行した当台職員の労をねぎらいたい．

高層気象台長　益子　直文